令和５年度 第３学期終業式 式辞

この度の能登半島地震において、被災された全ての方々に、心からお悔やみ、お見舞いを申し上げます。そして被災された地域の一日も早い復興を心から強く願います。

おはようございます。
３学期始業式に当たり、今日は皆さんに、一つ話をします。

私は、これまで２０年以上、毎日続けている取組があります。
先月、末娘が二十歳になりました。私は、その末娘が生まれた日から、これまでずっと毎日、わずか数行ですが、日記を書いてきました。１０年日記も３冊目になります。めんどくさいなと思うときもあるのですが今はもう日課になっていて書かないと少し落ち着きません。

１０年日記ですので、年ごとに１０段あり、上の段には、数年前のその日の出来事が書かれています。ときどき上の段を読み返し、以前は、こんなことで悩んでいたのかと、苦笑いするときもあります。
だから私は、たとえ今、とても悩んでいることがあっても、数年後は「あんな時もあったな」と笑える日が来ると信じて過ごしています。

なぜ、私が日記を書くようになったかというと、それは小学６年生の時の担任、高岡光子先生が、宿題でよく日記を出していたからだと思います。その日記のおかげで、私は、その後も、よく日記を書くようになりました。

特に、「怠けそうだな」と感じたときは、私は努めて日記を書き、自分を鼓舞してきました。そのいい例が、私の大学時代です。
私は、大学では理学部数学科に進学したのですが、当時私の大学の数学科はとても進級が難しくて、ストレートで４年生にあがる学生は定員３５人中９人程度でした。

普通に生活していたら留年すると私は考え、毎日、日記を書くことを自分に課しました。友人と遅くまで酒を飲み、勉強を全くしない日が続いても、必ず日記は書き続けました。そして、日記の最後には必ず、「頑張れ」と、自分を鼓舞しました。いわば、自分の中のもう一人の自分が、だらけている自分を応援していたのです。その日記のおかげで、私は無事に４年生に進級できたと考えます。

さて、令和６年、新しい年が始まりました。皆さんの中には、今年新たにチャレンジしてみたいと考えていることがあるでしょう。でも、その気持ちは、放っておくと消えてしまいます。その気持ちを持ち続けるためには、行動が必要です。その行動の一つとして、私のように日記をつけてみるのもいいでしょう。皆さんが、自分なりの自分を鼓舞する方法を考えて取り組んで見たらどうかと思います。

令和６年が、皆さんの飛躍の年になりますことを祈念して式辞とします。